全国の棚田保全・中山間地域活性化のための情報紙

棚田ライステラス

全国棚田(千枚田)連絡協議会

第24号 2001.11.30
(季刊・年4回発行)
発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会
編集／ふるきゃらネットワーク
〒169-0073 東京都新宿区百人町1-23-29-202
TEL 03-5389-9937／FAX 03-5389-0078
http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/index.htm

石川県輪島市第7回全国棚田(千枚田)サミット、千枚田結婚式

棚田を守るということの意味

九州大学大学院農学研究院教授・石川県中山間地域対策促進協議会会長
第7回全国棚田(千枚田)サミット・パネルディスカッションコーディネーター
村田 武

第7回全国棚田(千枚田)サミットのパネルディスカッションは「水と心のダムサイト日本海の風に乗せた先人の英知」と題して、千枚田で有名な石川県輪島市白米(しらよね)地区を素材に、棚田を守ることの意味を語り合った。

白米町区長で千枚田景勝保存会会長でもある田中喜義さんは、白米地区の歴史と千枚田保全の苦労を語り、梶文秋輪島市長は、千枚田を守るボランティア活動が昭和57年からの愛知県立安城東高等学校の修学旅行に始まる歴史と「千枚田景勝保存基金」事業など県や市、自治体のとりくみを語った。金沢市在住で一般市民代表ともいうべき早川和子さんは、外国人を輪島に何度も案内した経験をふまえ、棚田を守るくらしのなかに、「手づくりで、ていねいなくらし」を学ぶことができると発言した。富山和子さんからは、千枚田だけ守るということではなく、農村のくらしとトータルに守るということではないかと指摘をいただいた。

パネルディスカッションをコーディネートしながら、私が意を強くしたのは、棚田(千枚田)にもそれを支える多様性と地域性のあることを理解することが大切であること、全国から輪島市に参集いただいた方々にそのことを理解いただいたのではないかと感じたところにある。棚田(千枚田)は農業だけでは守れない、何も若い人がそろわなくても、定年後に戻って村づくりを担うという村民がいればいいのであってそれは要するにくらしの多様性を大切にしつつ、くらしを見直していく、くらしの環境整備に力を入れることではないか。北陸日本海沿岸に開かれた千枚田の歴史と先人の英知に学びたいというパネルディスカッションの結論はおよそこのようなものであった。

第7回全国棚田（千枚田）サミット開催される！

特集

全国棚田（千枚田）サミットも７回目を迎えた。開催地は、国文化財名勝指定を受けた白米千枚田のある石川県輪島市。8月31日（金）～9月1日（土）の2日間、「水と心のダムサイト」をテーマに、35都道府県から約1300人が集った。輪島市の千枚田といえば、１９７０年から県と市による耕作補助金が支払われ、1993年には「（財）千枚田景勝保存基金」が設立され、運用益と市の補助金によって、昔ながらの姿のまま、千枚田の保全が積極的になされてきた地域である。今回は、千枚田で大規模な結婚式が行われるなど華やかなサミットである一方、直接支払制度によって保全活動に拍車がかかったこともあり、互いの情報交流を強く求める場ともなった。では、今回のサミットを8つの側面から浮かび上がらせてみよう。

1【首長等会議】

首長等会議盛り上がる

今年のサミットは、全国棚田（千枚田）連絡協議会首長等会議において、互いの情報交換を含めた活発な議論がなされた。その内容を紹介しよう。

石積みの保全にどう取り組むのか

大草秀幸（佐賀県相知町長）：わが町に40ha１０５０枚の石積みの棚田がある。数年前から畦畔部をコンクリートで固めるという整備が進んでいるが、なんとか昔のままの石積みで残したい。しかし生産者の方は、高齢化が進み、畦畔が危なく、コンクリートで固めてほしいという希望だ。こうした悩みをどうすればよいか、また取り組みなど教えてほしい。

堀　万治（福岡県浮羽町長）：わが町の棚田は１００％石垣。現在、石垣職人が非常に減っており、ボランティアで「石垣保存会」をつくってもらい、後継者を残そうと活動中だ。災害復旧時、業者にも自然石を使ってもらうようにし、県にも災害復旧事業での自然石による石積みを設計に入れるようお願いしている。

松永雅男（福岡県星野村長）：悩みは同じ。わたしたちはメインになる一番良い棚田に対し、棚田保存条例をつくり、てこ入れをしている。畦畔コンクリートを施すと、彼岸花が咲かなくなるため、美しい棚田のところは避けてほしいと農家にお願いしている。また、メインの棚田でコンクリートブロックで補強してあるところを自然石に変えたところもある。

中島峰広（早稲田大学教授）：兵庫県加美町でも同様の悩みを聞いた。石積みの場合、根積みにすると水が抜けず、かえって危ない。保全面からも空積みが良いが、石工の技術の伝承が途絶えているのが問題だと。石工の確保で困っている。石工の学校のようなものがつくれないか、全国でそういう組織はないか、という相談を受けた。せっかく同じ悩みを抱える町村が、ここで一同に介しているのだから、互いに情報交換し、保全対策や横のつながりをつくっていったらどうだろうか。

大島暁雄（文化庁主任文化財調査官）：情報提供として、文化財保護法に文化財保存技術の条項があり、そのなかで城郭の石垣など職人技術を選定保存できないか、文化庁では現在模索している。今後、城郭の石垣と棚田のような身近な技術の違いが問題になるだろうが、技術の養成についても検討しているので、こうした動きと歩調を合わせることで一つの道筋があるかもしれない。

齋藤仁志（農林水産省農村整備課長）：確かに災害復旧で、コンクリートで直してあるのは目立ち、無粋な感じがする。ある県では、目立つところだけは石積みにしていた。全国的にも若干、石積みを取り入れているようだ。金銭的にもかかること。地域の状況を見ながらできる範囲でやることが可能なので、県とも相談し、それぞれの地域で検討されたらどうか。

阿久津孝夫（農林水産省農村整備課）：棚田地域等保全整備事業で、営農継続を可能にするための簡易な整備ができる。営農継続が目的なので、地元農家、町、周辺住

2【講演・シンポジウム】

富山和子氏の講演、シンポジウムで確認した切実な現実

サミット1日目の8月31日（金）の午後は、富山和子さん（評論家・立正大学教授）の基調講演「水と緑の国、日本―地球環境と日本農林漁業の役割―」では、日本の国土や環境を守ってきた米づくりの尊さを説いた。

その後続けて行われたシンポジウム「水と心のダムサイト」では、コーディネーターに九州大学大学院農学研究院教授・石川県中山間地域対策促進協議会会長、村田武さんを迎え、パネリストに、富山和子さん、早川芳子さん（会議通訳者・石川県中山間地域対策促進協議会委員）、田中喜義さん（白米町区長・千枚田景勝保存会会長）、梶文秋さん（輪島市長）の4名が1時間30分に渡って、千枚田の価値を確認しあい、耕作放棄が進むなか、保全をし続けていくことの現実的な困難さ等を議論しあった。

会場では、富山和子さんの著書が販売され、サイン会も行われた。

基調講演

民の方で協議して合意できる範囲内の整備に対し、補助を進めていきたいと思う。受益者負担もあり、整備後も農家の負担が一番大きい。それゆえ農家の方の負担にならない程度の整備を支援していきたいと思っている。

谷崎勝祥（徳島県上勝町・個人会員）：わたしは棚田で耕作している百姓。写真を撮りに来られた方が「あのサロンパスが」と間知ブロックのことを指していう。わたし自身は、20年余り前から自分で石を積んでいるが、サロンパスといわれた田んぼのもち主も次第に「うちの田んぼのサロンパスがなかったらええのに」というように変わってきた。一昨年には、崩れたところを「かっちゃん（谷崎氏）が積むんじゃけん」と70前後のベテランが石で積んだ。

保存地域だから石で積む災害復旧を認めてくれというより、百姓は、米づくりも石積みも、茅葺きもいろいろなことをするから百姓なのであって、石積み保存も、こうした農家を見つけて、農家と行政が手を握れば、ある程度維持も可能ではないかと思う。

棚田を支援する人が増えなければ、保全はできない。

中越武義（高知県梼原町長）：今年、梼原町ではオーナー制度が10年目を迎え、10年を反省し、今後10年をどうするか、地域「ふるさと会」と検討をしている。10年経ち、平均年齢53歳が63歳になった。「後10年がんばる」と大きな声でいってくれるが、われわれがただ多面的機能、文化的なものがあるといっても、それを理解してもらい、支援していただく方が増えなければ棚田は守っていけない。放棄地が出る現状を、いま全体的な方向としてどうするか。棚田地域を行政が買い取る、返して欲しいというときは返す、その間の管理を委ねるなど方法はあると思うが、どう保全していくか、意見を出し合い対応することが必要。

一番は、多くの人にこの現状を理解してもらうよう、どうPRしていくか、棚田の効用をどう考えてもらうか考えなければならない。こうした機会に棚田の効用、全体的な方向付けを、多くの皆さんに知ってもらうような方向付けをぜひ考えていただきたい。

高野光世（東京都・個人会員）：昨晩、白米千枚田保存会長さんと話をした。ここの千枚田は観光の一つで、人は「素晴らしいね」と通り過ぎるだけ。千枚田を維持している方々に直接的な利益がない。集客にどのくらい貢献しているのか、保全に対し都市の方からどのくらいの理解が得られるのか、またそれをお金に結びつける政策が必要。カメラマンから寄付のシステムがあっていいし、景観に経済効果があることを地元の人が理解できる方策が必要。そのためにも景観維持には、苦労と費用がかかることをもっと宣伝していただきたい。

また個人会員の会費の納入率が良くないと理事会でもあったが、それは協議会の活動の中で個人会員の参加する場がほとんどなく、やめてしまうこともあると思う。都市の人たちへのPRの工夫をもっとした方がいい。

梶　文秋（座長・石川県輪島市長）：輪島市もこれから先どうするのか悩んでいる。昭和45年から耕作補助金を出して、平成3年に一旦、県の補助金がうち切られ、市4千万円、県2千万円、地元経済界2千万円と棚田保存の基金をつくった。いまは金利が下がり、市の直接補助金で運営している。ありがたいことにボランティアの方が、多いときは年間1000人を越える人が棚田にかかわってくれているが、高齢化が事実進み、ほんとうにこの先どうするのかという状況。棚田の有効性を理解してもらうためにも、ボランティアのみなさんとのかかわりは大切にしていきたい。

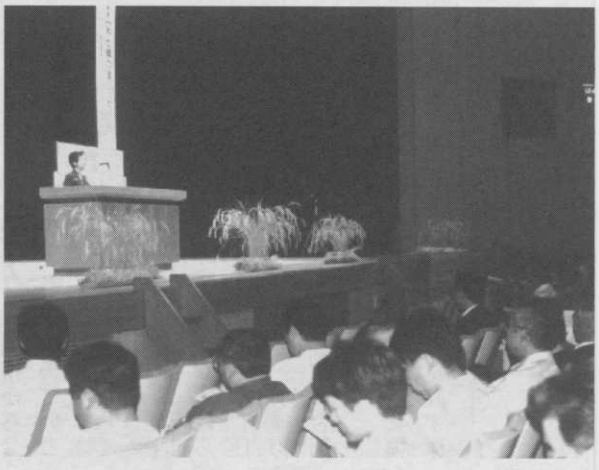
いろいろな事例を紹介していただきたいし、幹事会でも充分話をし、個人会員の方からなどいろいろな角度からのご提案をいただきたい。

山本（長崎県千々石町農家）：わたしは農業をしているが、先ほどの話から、あと10年後棚田を守っていけないという話に、減反の問題が一つも出てこないなと不思議に思っている。減反を消化するために田んぼが荒れている。棚田百選に選ばれている中山間地域から減反問題についても、国にも言葉を発していくことはできないか。中山間地域の効率が悪い農業というものを見直していけるような横のつながりはできないものかと思う。

梶座長：ここで出た意見が、棚田を耕作していく貴重なエネルギーの一つになっていけばいいと思う。これからの会議のあり方も考えさせられた。今後、ここで出た意見が集約されていくよう、次なる幹事会理事会のなかでも、申し上げていきたい。

シンポジウム

輪島市は、白米千枚田に対し、1970（昭和45）年から耕作補助金を出し、保全に務めているが、高齢化が進むなか保全が困難になってきている。千枚田は、ボランティアやオーナーでは守りきれない。未来につないでいくために今後どうすべきか、助成金の増加やエコ・ミュージアム化などまちづくりの一環として、保全活用を考えていくべき等、意見が交わされた。



富山和子さんは「日本の山は米がつくった」と日本の環境を支えてきたものは、土をつくり、水をつくる米づくりであったことを説明。日本の豊かな文化は、営々と土を耕してきた結果生まれたもの。農地は、祈りと労働の蓄積であり、この土を守っていくことの重要性など、農業の重みを説いた。

③【千枚田結婚式】

千枚田がダイナミックな結婚式を演出！

新郎新婦は、1組は山形県、あとの2組は輪島市内から。仲人は、梶文秋市長夫妻が務めた。

結婚式は、黄金色の稲穂のなかに創られた真っ赤な特設ステージで執り行われた。ステージに向かう途中、「縄張り」という伝統的なならわしにのっとり、仲人および新郎新婦は、集落の人々による縄を張っての足止めに、菓子等を振る舞いながら通っていった。

2日目の9月1日（土）午後は、眼下に日本海が広がる白米千枚田を舞台に「千枚田結婚式」が行われた。全国公募され決定した3組のカップルが、千枚田を渡る日本海の風に吹かれ、サミット参加者に見守られ、結婚の儀を無事終えた。

④【豊富な観光資源】

「朝市」「漆器」、「千枚田」

2日目の午前中は、地元朝市会等の方々によるユニークな案内のもと、朝市や漆器会館、キリコ会館など豊富な輪島の観光地を楽しんだ。観光地としての輪島市の実力に目を見張りながら、こうしたなか観光資源として守られてきた「白米千枚田」の現代史、そしてその苦難等を垣間見ることができた。

朝市。朝市にはなんでもある。日本海の恵みから、野菜などの食材。日常の道具類や器。土産ものなど豊富だった。

⑤【サミット開催希望の声】

全国棚田サミット開催希望地増えています！

次回、2002年全国棚田（千枚田）サミット開催地は、千葉県鴨川市。2003年の開催地として岐阜県恵那市が、今回の理事会、総会において決定した。そして、現在、サミット開催希望の声が続々とあがっている。総会においては、宮崎県日南市が開催希望の意志表明をし、そのほか佐賀県相知町、愛知県鳳来町がサミット開催を希望している。そんな声をおたずねした。

タナダからの手紙

佐賀県・相知町長　大草　秀幸

相知町の「蕨野の棚田」にとって、2001年秋は画期的な収穫の年となりました。本年産米から独立ブランドが実現し、日本の棚田百選・棚田米「蕨野（わらびの）」としてデビューを果たしたのです。タナダからの耳寄り情報でお便りします。

40ヘクタール、1050枚の石積み棚田から収穫した佐賀県オリジナル品種「夢しずく」30トン分を確保し、5キロ袋（価格2800円、送料別）で6000袋を売り出しました。棚田米生産農家で組織した「蕨野棚田保存会」が販売元となり、今も営業を続けています。生活雑排水が一切入らない低農薬栽培の食味満点の米。平野部の数倍も手間をかけて生産した自信作です。「安売りはやめよう」と思い切った新ブランド。低温乾燥でモミ貯蔵し、毎月精米して出荷するのです。

田植え後の棚田ウオーキング開催時に獲得した150袋をはじめとする事前予約300袋でスタート。デパートや農産物直売所での新米デビューセールやホテルの大口契約などで売れ行きも順調です。この勢いで来年5月までには売り尽くしたいと思います。

前月には福岡市などからの消費者150人の参加で菜種まきをしましたが、来年春、蕨野の棚田40ヘクタールは黄一色に染まるはずです。

この蕨野棚田を舞台に、2004年の「第10回全国棚田（千枚田）サミット」を開催させていただきたいと熱望しています。人口9000人の小さな町ですから大掛かりなサミットを準備することもできませんが、里山と石積み棚田が混在し、九州でも屈指の規模を持つ蕨野のたたずまいにきっとご満足いただけると確信します。それより何より「先祖から受け継いだ棚田をなんとしても守っていこう」という60数戸の生産農家の意気込み、団結を見ていただきたいのです。

輪島市の「白米の千枚田」を舞台に開かれた今年の第7回サミットは、すばらしい企画で参加者をうならせました。日本海を背景にした実りの棚田で、羽織袴と文金高島田の幸せカップル3組の合同結婚式。まさに実り多き集いでした。

こうした棚田保存の取り組みが、食糧の海外依存が大きい日本農業を見直す原動力になっていくものと信じています。

輪島の棚田サミットから帰って

愛知県鳳来町長　下江　利幸

平成7年、高知県椿原町で開催された第1回全国棚田（千枚田）サミットに参加した折、当時の中越椿原町長から「万里の長城も偉大な文化遺産だが神在居の千枚田も偉大な文化遺産だ」と言われた司馬遼太郎先生のお話をお聞きし深い感銘を受け、わが町の千枚田の保全に意を強くして帰ってきたことが思い出されます。

21世紀を迎え、第7回の全国棚田（千枚田）サミットにわが町の四谷千枚田の鞍掛山麓千枚田保存会のみなさんと共に参加し、日本海を背景に細やかな曲線美を描いた白米千枚田の美しさに深く感動し、あらためて棚田を築き上げられた先人の英知とこれを受け継ぎ守り続けてこられた人々の努力に感謝し、棚田は、稲作文化、山村文化を語るに欠かせない「日本農業」の原点であり、守らなければならない貴重な文化遺産であると再確認しました。

四谷千枚田の保全に向けては、椿原サミットから帰ると早速、地元の人たちに千枚田保存会の設立を呼びかけ、時を同じくしてNHKの「日本まんなか紀行」で四谷千枚田が紹介されるなど保存会設立に向けての地元理解が深まり、平成9年1月に鞍掛山麓千枚田保存会が発足しました。

爾来、全国棚田（千枚田）サミットへの参加、千枚田保存のためのアンケートの実施、調査研究など保全に向けての地道な活動を続けてきました。平成11年7月には、日本の棚田百選に認定され、昨年には、地元念願の「ふるさと水と土ふれあい事業」による棚田の構造に合致した農道整備事業等々の事業が採択され、ハード面において、千枚田保全に向けて大きく進展することができました。また、中山間地域等直接支払制度の創設は、ソフト面においても千枚田の保全に大きな力を与えてくれました。今年の春には、田植え体験の開催、秋には、農道整備工事の着工と千枚田の維持保全に向けて着実に進んでいます。

わが町でも、こうした千枚田保全への取組みが進んできたことで、地元にも棚田サミット開催への機運が高まってきています。2005年には、「自然の叡智」をテーマに愛知万博が開催されます。日本列島の中心に位置する愛知を舞台に全国から世界中から多くの人が訪れます。また、東三河を中心に愛知万博のプレイベントとして「自然環境、交流・体験、文化」をテーマに森林祭が計画されています。

私は、ぜひとも2005年に本町において、全国棚田（千枚田）サミットを開催し、これらのイベントとの連携の中で地域をあげて、より多くの人々に棚田の持つ役割、価値を再認識していただく絶好の機会としてまいりたいと考えています。

全国棚田サミットに参加して

宮崎県日南市長　北川　昌典

「水と心のダムサイト」をテーマに第7回全国棚田サミットが、輪島市の皆さまの御尽力により、盛大に開催されましたことを心より感謝申し上げます。

輪島市白米町の千枚田を国道249号から一望すると、私たちが普段見慣れている太平洋と趣の違う、どっしりとした日本海、その日本海になだれ込むように迫ってくる千枚田、その美しさには深く感動を覚えました。また、急斜面に無数に広がる幾何学的な模様の田は、先人達の米づくりに対する気迫と、能登の厳しい農業の様子をうかがい知ることができ、今日まで美しい千枚田を守り続けられた地元の方々に敬意を表します。

今日始めて棚田サミットに参加し、棚田を有する市町村・棚田に造詣の深い個人・団体の方々の意見を伺い、改めて棚田保全の難しさと大切さを実感いたしました。今後の保全活動として、ナショナルトラストやNPOといった体制づくり、そして農業の枠を超えた社会全体の取り組みが必要であると強く感じた2日間でした。

さて、日南市には、平成11年度に「日本の棚田百選」に認定された「坂元棚田」があります。坂元棚田は、日南市の最高峰である小松山（989m）の麓に広がり、小松山を水源に清らかな水が谷川から棚田へと流れ込んでいます。

昭和3年から10年にかけて開田され、棚田としては最も新しいものと言われております。田圃は整然とした長方形であり近代的なイメージですが、石積みは小さな石と大きな石を割って積み上げられ、荒削りで素朴な暖かみのある棚田です。

現在、「坂元棚田」では、地元住民の手によって棚田一面をれんげで彩る「棚田祭り」が毎年春に開催され、衰退する集落になんとか活力を与えようと取り組まれております。

日南市としても、地元住民の棚田と集落の活性化に掛ける、熱い「思い」に応えたく、今回の首長会議において、全国棚田サミットの日南市開催の意向を発言させて頂きました。

日南市の棚田保全は、今始まったばかりですが、地元住民と行政がパートナーシップを築き上げ、「棚田と農村の維持」をキーワードに、美しい棚田景観の保全と農村活性化の方法を模索していきます。

今後とも全国棚田連絡協議会の皆さまとともに、棚田の未来を開き21世紀の社会の未来を築きたいと念じております。皆様のご指導をよろしくお願い致します。

総会にて、宮崎県日南市長がサミット開催希望の意を表明。

⑥【北陸からの参加】サミットに参加した北陸近隣の棚田状況

今回は、富山県や石川県内からの参加も多かった。そんななかから、北陸の状況をレポートしてもらった。

北陸の棚田保全の取り組みと課題

北陸農政局整備部農村整備課調整係長　谷口　和重

去る8月31日、9月1日の2日間、石川県輪島市において第7回全国棚田（千枚田）サミットが開催されました。初日は輪島市文化会館で基調講演やパネルディスカッションなどがあり、全国各地から約1300人もの方々が参加されました。2日目には、国の名勝にも指定された「白米の千枚田」において輪島市長夫妻の媒酌により3組合同の結婚式が盛大に行われ、観光客ら約500人から祝福されました。

棚田に対して多くの方々が強い関心を持っておられることと、その保全について真剣に考えておられることを再認識し、深い感銘を受けました。

さて、北陸（新潟県、富山県、石川県及び福井県の区域）では、それぞれの県において棚田保全活動が積極的に取り組まれています。以下、その概略をご紹介します。

先ず新潟県では、日本有数の地すべり地帯に多くの棚田が発達しており、地域農業者の高齢化等から棚田の管理が不十分なところについては、「ECHIGO棚田サポーター」というボランティア団体が草刈や水路の掃除などを行い、地域の人たちとの交流を深めながら棚田保全を進めています。

富山県では、棚田地域の集落活動の活性化を図るため、「富山県棚田地域水と土保全基金」を造成し、その運用益を活用して都市部の住民の方々に棚田保全の必要性をPRする広報誌の発行や講演会などの開催、集落組織が行う棚田の保全・利活用活動に対する助成などを行って、地域の人たちが自主性をもって行う棚田保全活動を支援しています。

石川県では、「白米の千枚田」が国の名勝に指定されたことに刺激され、県内各地の棚田でも保全活動が活発化しています。

福井県においては、「日本の棚田百選」に選ばれた「梨子ヶ平」の棚田で特産の水仙を栽培し、水仙畑のオーナー制度を導入するなど、地域住民活動の活発化と都市住民との交流促進が図られています。

棚田の保全には、地域の「やる気」が最も重要であると思われます。行政としても、この「やる気」のある地域に対して最大限のお手伝いをしていかなければならないと考えておりますので、皆様のご意見、ご要望等をお聞かせ下さい。

富山の棚田保全の取り組み

富山県農林水産部企画管理課　山本　健次

棚田サミットへは、隣県として、地元、市町村、県担当者等合わせて25名が参加させていただいた。交流会では全国の方々と情報交換ができ、また白米の棚田の景観、保全活動のすばらしさに感動させられた。

富山県は、ほ場整備率が全国トップクラスであり、整備済みの比較的条件の良い棚田が多いものの、棚田地域における人口の減少、高齢化の進行、耕作放棄地の増加等の問題は他県と同様である。

県では、県棚田基金事業により、棚田保全の必要性等のPR（情報誌・パンフの発行、シンポジウムの開催等）や、棚田保全活動支援（市町村への補助）を行っている。保全活動は市町村が事業主体となって取り組むことが基本であるとの考えから、1年目は市町村の棚田保全方針策定に支援（20万円）し、2年目からは地域の保全活動に支援（1地区年50万円、3年が限度）している。今年度は4地区で保全活動支援しており、来年度からは毎年4地区ずつ支援地区を増やしていく予定である。

県内での主な棚田保全活動の取り組みとしては、氷見市長坂の棚田オーナー活動（棚田百選地区、3年目で55組250人参加）、八尾町三乗の棚田の学校活動（棚田百選地区、春・秋の農作業体験、1年目で約30名参加）、利賀村の耕作放棄地復元活動（みんなで農作業の日と名付けてソバの種まき作業、2年目で約170名参加）などである。

また、今年夏、県立農業高校生20名が自分たちも棚田保全に貢献したいと、自主的に「棚田を守り隊」を結成し、八尾町で畦の草刈り作業に取り組んでくれ、新たな形の活動が始まった。

棚田の保全は、その地域だけではなく都市の人々の理解や支援が必要である。棚田に関する情報交換や保全活動の支援等を目的とする会員組織としての「とやま棚田ネットワーク」の設立と、設立記念の「とやま棚田フォーラム」を11月29日に行うこととしている。

棚田について思うこと

石川県土地改良事業団体連合会管理部長　杉森　一夫

棚田は少しでも多くの収穫を得るため開拓された土地で、生活と大切な家族を守るために、先人達が限られた土地を知恵と努力の結果によって生まれたものです。石川県には輪島白米の千枚田のほか数多くの棚田がありますが、いずれの地区も深い山あいではなく、能登地域のいわゆる中山間地域に有り、集落の人達によって細々とその土地が守られています。

白米の千枚田は早くから能登の観光地として脚光を浴び、集落の人達の大変な努力でその保存がされています。白米地区にはこれまで何回か地球人会議活動の一環としてボランティアに参加し草刈りに出かけたことがあります。私は田んぼで農作業をしたことがなく、傾斜地での草刈りは大変な作業でした。畦の草刈りでも大変な事だから、田植え、稲刈りなどの農作業は

平地での大きな区画で機械化された作業と比較すると大変な重労働だと思います。

今回参加した輪島サミットでのシンポジウムで、白米の区長さんがボランティアの人達は作業が終われば帰っていかれるが、私たちは帰れないと言っておられたのが印象に残っています。

棚田は昔から生活のために、いろいろな工夫がされ守られてきた日本の財産です。誰かが守らなければならないものです。今日では、いろんな生活手段があり土地に対する愛着が薄れてきたものと思います。

私は山菜やキノコ取りに出かけることがありますが、以前は山あいの至る所に耕作地があり、農作業をする人達を見かけましたが、今はそうした田んぼには木が林立して、山あいの様子が変わっています。集落の人達が山に入るなど、林業が盛んな時は山菜取りに出かけても歩きやすかったのですが、今はどこまでが耕地なのか、山なのか区別がつかなくなっています。

今、地球環境、食料自給、農村の過疎化が大きな論議となっています。農業農村が果たしている環境の保全、安全な食料の確保と共に農村の活性化のため、各地域でいろいろな取り組みが行われています。こうしたことは、一人ひとりの取り組みが大切です。私たち地球人会議活動でも、食料、環境、農村をテーマに広く一般消費者の方々に講演会の開催や情報誌の発行などでその大切さを訴えています。私自身も叶うものなら、小さな山の手入れと、山あいの農地での仕事ができればいいなと思っています。

地球を守るのは一人の小さな決意から。

「棚田新世紀」

石川県七尾市農林水産課長補佐　室塚　義明

日本の米づくりは肥沃で水に恵まれた平地を中心とした田んぼが発祥であるが、いつの頃か山間部にも米づくりが広がり、田んぼが形成されて「棚田」が生まれたと推測される。本市の「棚田」が形成された年代は定かでないが、捨てられつつある時期は現在であることは間違いない。棚田を守り続けてきた農家はいつも同じことだが、「平地も山間地も米の値段は変わらない。反収も少なく、日常管理も大変だ。平野部の人にはこの苦労はわからない」というのは、生産現場にある棚田住人のひとりごとである。

本市の水田のうち、耕作可能な棚田（1／20以上の農地）が占める割合は約27％である。棚田では、高齢者が細々と農地を守る農家や若い後継者が機械で効率的に作業をする農家。有志による組織営農など多様であるが、棚田を守り続けていることは間違いないし、今後も守り続ける必要がある。

このような中で、棚田を有する本市として、本県の輪島市で開催された第7回棚田サミットに参加し、日本各地で熱い意気込みと強い信念で守り続けている人たちの気迫を感じ取り、保全活動を進めていく上でのヒントを得ることが大きな目的であり、多彩で多様な棚田の保全活動を知ることができた。特に感じたことは、棚田を集落や農家自らが守ることに力を注いできた活動から、都市住民が自らの意志で棚田を訪れ、生産の場のみならず、自然や文化、景観など棚田地域全体が愛されるような活動が、今後は重点的に取り組む必要があると感じた。

本市では、若者の人口流出から少子化へと時代が移行し、人口減少に拍車がかかり、社会的な大きな課題に直面する時期が到来しつつある。このような中で、棚田はどう生き残っていくのか。まずは、都市住民と正面から向き合い、共生していく活動が最善だろうと思うが、果たして現場の意識はどうだろうか？　棚田を守ることは、そこに住んで生活を体験した者でないと、その苦労を知ることはできない。

棚田新世紀は、先達が残してくれた棚田の存在感と価値観をしっかりと理解し、保全するための具体的な支援活動や保全施策、体制づくりなどを積極的に推進していく必要があると感じている。

棚田オーナー制度導入中！

富山県氷見市農政課主幹　吉崎　新一

棚田オーナー制度は、地域を活性化させるため、都市住民との交流を目的とした棚田活用事業です。オーナー制度のみで棚田の保全ができる訳ではありませんが、この交流が地域を元気づけることは確かです。氷見市長坂集落では、平成10年、棚田地域等緊急保全対策事業の実施を契機としてオーナー事業を導入しました。その内容は、オーナーが料金を支払い、田植えや稲刈りなどを体験し、栽培管理は地元の壮年層で構成する「椿衆」が担当し、一定量の収穫米を受け取る。そして、草刈りや田植え、稲刈りのときは、村全体で協力する。いわゆる保全コースと呼ばれる方式で取り組みをはじめました。

オーナー会員の募集に対して、11年の申込者は44組、12年は50組、13年は55組。関東や関西、中京、北信越、県内の人たちです。うち39組が昨年からのリピーターでした。13年度の収穫作業は9月22日、23日の2日間にわたって実施され、2日とも快晴に恵まれ、参加した会員たちは、「椿衆」や地元農家の指導のもと稲刈りやはさ架け作業をし、心地よい汗をかきました。作業後は、村の女性部から心尽くしの栗おこわやみそ汁が振る舞われ、農家とオーナーの交流がより一層深まった秋の作業風景でありました。

美しい日本の原風景を代表する棚田。多面的な機能を有する棚田。この貴重な地域資源の棚田の保全についていろいろな施策が講じられております。これをより推進するため、地区の学校食農教育の一環として子どもたちに農業体験をさせたり、地区の高齢者に草刈りやえざらえ（用水路掃除）などにボランティアとして参加してもらうことなどが考えられます。そうした活動を通して作物を育て、収穫する喜びや充実感を味わう。また農業や食料に対する理解醸成も期待できるものと考えます。

さらに、棚田は体験学習の場、農村と都市、大人と子どもたちの交流の場であり、豊かな心を育てる場でもあります。採算性だけでは図ることのできない価値ある機会を与えてくれる場なのです。さらには国土を保全し、下流住民の暮らしと安全を守ってくれる棚田を保全し、地域の活性化にむすびつけていきたいと考えております。

7【全国からの参加】やっぱり全国サミット。さまざまな地域からの参加があります！

毎年のことだが、棚田サミットには、全国から人が訪れる。今回、北は青森県、南は鹿児島県と幅広い顔ぶれが集まった。協議会会員、非会員に問わず、互いの情報交換の場となった。そんななかから、協議会自治体会員である滋賀県高島町と、山形県山辺町から感想と町の状況を寄せてもらった。

棚田保全への思いは一つ

山形県山辺町産業課農政係主任　佐藤　英敏

第7回にして初めて参加した輪島市でのサミット。基調講演やパネルディスカッションなどをとおして棚田の存在意義をあらためて実感し、保全のために何ができるのかを問いなおした2日間でした。棚田に思いを寄せる全国の仲間との出会いがあり、これがきっかけで愛知県鳳来町の写真を送っていただきました。

日程2日目は午前中だけの参加でしたので「白米の千枚田」見学はあきらめかけましたが、農業の歩みを凝縮した千枚田の姿をなんとしてもこの目で…という気持ちから、わがままを言って輪島めぐりから抜け出し、千枚田へ直行。独特の幾何学模様が目に飛び込んできた瞬間、先人が築き、たくさんの人々の手で守られてきた努力を想像し、感動を覚えました。実行委員の皆さん、本当にありがとうございました。

わが山辺町にも日本棚田百選に認定された棚田があります。県都・山形市から西に約20㎞、百戸あまりの静かな集落・大蕨にある棚田です。米づくりにおける最大のこだわりは、杭掛けによる自然乾燥。秋には、数千本もの稲杭が見事に立ち並びます。最近では、これほどまとまった〝稲杭のある風景〟は珍しく、子供のころに野原で遊んだ遠い記憶と重なり、心に安らぎを与え、郷愁を誘います。棚田百選の認定は3.4haですが、町ではその周辺を加えた16・6haを「大蕨棚田」と称し、保全に努めています。棚田の魅力は杭掛けの風景も含めて、四季折々に農の風景を醸し出すところにあります。地区では、棚田を核とした都市との交流、写真コンテスト、農産物即売、棚田米の消費拡大などに取り組んできました。

平成12年、現状のままでは失われかねない原風景の維持保全と自然乾燥米の味を知ってもらいたいという願いから、オーナー制度を導入しました。体験コースではオーナーが農家の指導を受けながら田植えや稲刈り、杭掛けで汗を流し、親切な指導とそれに応えるオーナーの声が棚田にこだまして楽しいひとときを過ごします。地元の産物による料理も振る舞われ、棚田米で仕込んだ純米酒「棚田の郷」を酌み交わしながら棚田の話で盛り上ります。交流の拠点としてオーナー自身が空き家を確保するなど、着実にファンを増やし交流を深めている大蕨。これからも、棚田が多くの人と人とをつなぐものと期待されます。

「これぞ日本の原風景」

滋賀県高島町農林水産課係長　山田　善嗣

『田植えしたのが999枚　あとの1枚　蓑の下』。蓑の下にも隠れてしまうほどの小さな水田を、驚きと感慨をもって詠った古謡が残されている白米の千枚田。紺碧の日本海から急斜面に細やかな曲線模様を描いて積み重なる棚田の景色は、間違いなく日本の原風景そのものである。話には聞いていたが間じかに見てスケールの大きさと見事な風景に感動を覚えた。先人の優れた知恵と努力によって築かれ、厳しく過酷な歴史の中で営々と粘り強く守られてきたのだろう。しかし、美しい景観の裏にある「農家は最盛期の16戸から8戸に、1600枚を数えた水田も900枚に減った」という現実。わが町の「畑の棚田」とオーバーラップし、耕作を継続していくことの難しさ。地元農家のきびしい現実がそこにある。

高島町には、滋賀県下で唯一「日本の棚田百選」に選ばれた「畑の棚田」がある。ここ「畑の棚田」は比良山系の最北端に位置し、標高400mの山間地にすり鉢状に棚田が広がり棚田に見守られるように集落が点在している。比良山系を源とする豊かな清流と眩いばかりの緑に囲まれ、先人たちの手によって階段状に石積の棚田が綺麗に積み上げられている。しかし、棚田を抱える地域の共通の課題である景観維持が、今極めて困難な状況になっている。

町では美しい棚田と安らぎに満ちた山里の衰退を憂い、棚田保全と地域の活性化を図るため「畑の棚田ふれあい交流事業」を実施している。その一つが「棚田オーナー制度」である。都市住民に棚田での農作業を体験してもらい、美しさだけではない棚田の厳しさを理解してもらうことで、棚田保全の輪を広げていこうというものである。

棚田を舞台にした交流事業はオーナー制度だけにとどまらず、棚田まつりやフォトコンテスト、かかしコンクールなどのイベントとのジョイント企画が棚田のPRにとって大きな役割を果たした。また、この企画がいち早くマスコミに取り上げられたことがより大きな集客を生み、新たな展開へのステップとなった。

都市住民との交流がはじまり集落が明るく活気づいてきたとの区民からの声も聞かれるようになった。行政主導ではじまった都市住民との交流は、今区民全体にも浸透しはじめ、山間集落ならではのコミュニティを大切に守っていこうという思いが都市住民を温かく受け入れ、リピーターを数多く生み出している。

こうした都市住民との交流は、今はじまったばかりであるが、着実に地域に変化が表れてきており、今後さらに継続することがより地域のイメージアップと観光面や商業面への経済効果につながるものと確信している。

8【個人参加者】全国棚田サミットは個人参加の関心が高い！

サミット参加者で忘れてはならないのが、個人会員や個人の参加者である。都市住民の棚田への関心は熱く、個人での参加者も多いのが、棚田サミットの特徴だ。そんななかから率直な感想を届けてもらった。

私にとっての棚田と棚田サミット

石川県議会議員　広岡　立美

小学5年生のときだっただろうか、石川県生まれの私は社会科見学にバスで能登を回った。何カ所も行ったはずだが、覚えているのはバスガイドさんの千枚田の説明と、ちくわ工場でもらった焼きたてのちくわの味だけである。当時は棚田ということばを知らなかった。

仕事が終わったお百姓さんが田の数をかぞえてみた。千枚あるはずの田が何度数えても1枚足りない。疲れてしまって家へ帰ろうと蓑を手に取った。そうしたら、その下に小さな田んぼが1枚あった。千枚田はそれほど小さいということが、そのとき妙に印象深かった。いわゆる町の子であった私は、田んぼについての記憶はそれくらいである。

そんな私が、子育て中に東京で劇団ふるさときゃらばんに出会って、石川県金沢市での公演を実現させたのが縁で棚田を知ることになった。そして、棚田フォトコンテストの委員になってくださいとの電話をいただいたとき、軽い気持ちで「はいはい」と返事をした。日本の各地にある棚田の素晴らしさを、まず、写真を通して知った。水を張った棚田、刈入れが終わってかさかさと音がするような棚田、雪化粧をした静寂の中の棚田。すべてが私に日本を感じさせてくれた。

それからは、棚田サミットに出席することで、微かではあるが日本の農業に接するようになった。稲刈りの経験もした。ハサかけも、どれもこれも、からだじゅうがかゆくなって、しんどくて、でも充実感を味わうことができた。

その後、ひょんなことから主婦であった私が石川県議会議員になった。1年目、産業委員会の委員になった。そして、日本の農業について、棚田は日本の農業を支えている大きな柱の一つであることを知った。その農業を支えているのは6割が女性であることも知った。

2年目、大学を卒業した娘が山形県で農業をはじめた。ここまで来てしまっては、もう私の人生から農業は切っても切れなくなってしまった。

今年、輪島の第7回棚田サミットの個人会員懇親会で中国桂林の棚田の写真を見せていただいた。すごかった。スケールが違う。まさに空へ続く階段のように、高く高く続いている棚田。棚田を通して、あらためて自然の大きさと恵みを感じた。

私が期待する棚田サミットの場

―輪島サミットに参加して

㈲環境とまちづくり　澤田　俊明

■私が期待する棚田サミットという場

棚田サミットとは、どんな場であろうか。そして、その場を最大限に生かす場とは。1年に1回棚田を持つ場で開催される場、棚田耕作者・棚田ファン・関係行政など多くの棚田をとりまく関係者が一同に顔を合わせる場……。こうしたサミットの特徴を考えれば、私がサミットに期待するものは、全ての期待度を100%として、これを大まかに区分すると、①情報入手・情報交換40% ②課題検討30% ③人材交流20% ④イベント10%、になるだろう。期待するというより、むしろ、私の体を棚田会場である現地まであずけてまで知りたいという欲求であり、これは、私の見るサミットの評価軸でもある。以下に、①、②の期待について少し記述する。

■情報入手・情報交換の期待

この期待は、主としてサミット開催地の棚田保全活動情報についてである。今回のサミットで、率直に期待したのは、【A現地視察】【B白米から学ぶ・白米に返す】【C全国の知恵を学ぶ】の3つで、【A】については割愛する。【B】は、当然の期待ともいえる。棚田地域では共通の課題ともいえる過疎・高齢化・後継者難・重労働等の課題に、どのように白米の棚田では取り組んでいるのか、景観保全観光型棚田施策や補助金支援等はうまくいっているのか、などサミットで知りたいことは、短に、現地を見るということだけでなく、棚田保全の仕組みや活動といった、輪島・白米ならでは、知恵・経験・成果であり、まさにこの点について、【C】地元の方や全国の参加者の方と意見交換を期待した。つまり、棚田学会とは違う意味での、生の棚田保全活動についての熱い情報入手・情報交換が、棚田サミットに参加すれば得られるのではないか、という期待である。

■課題検討の期待

この期待は、全国の棚田地域が抱える共通の課題や、新たな課題について、参加者の知恵・経験・活動などを意見交換し、共有するという期待である。課題解決なしには、多くの棚田保全の課題を有する棚田は保全できないのは自明であり、全国から【棚田保全の専門家】が集まる棚田サミットは、格好のチャンスの場であるはずである。

■輪島サミット

上記の主要な期待に対して輪島サミットはどうであったか。白米の情報のうち、上記【B白米から学ぶ・白米に返す】【C全国の知恵を学ぶ】については、残念ながら、サミットの公式プログラムではほとんど得られなかった。白米の棚田の情報や、全国の知恵の情報が最も得られたのは、サミット前日の棚田個人会員と白

米・千枚田保存会の田中会長との懇親会の場や、サミット当日のプログラム終了後の個人会員の集まりであり、サミット会場においては、昼休み等のロビーでの情報交換や、当日配布された〝ライステラス〟などからの情報であった。今回のサミットは、主としてプログラム企画構成上の課題を痛感させられるものであった。例えば、わずか1時間強の間に5名のコーディネーターやパネラーが登壇するパネルディスカッションでは、各パネリストのがんばりもあり、最終部分では会場の盛り上がりもあったが、時間制約から浅い議論に終始せざるを得なかった。そして、サミット公式プログラム上、実際に、地元の輪島・白米千枚田の田中会長のお話が聞けたのは、このパネルディスカッションの約15分程度の時間だけであった。一言でいうと、今回の輪島サミットは、【イベントのサミット】という感はいなめず、冒頭に期した「期待」をもって参加した者にとっては、少し残念なサミットであった。今後のサミットプログラムの再考を期待したい。

総会・首長等会議のようす。

次回サミットへもご参加下さい。

2002年　第8回全国棚田サミットは千葉県鴨川市にて

2003年　第9回全国棚田サミットは岐阜県恵那市にて

＊2004年開催地は、次回サミットで決定します。

第8回千葉県鴨川での棚田サミット、準備がはじまっています

鴨川市総合交流ターミナル　みんなみの里　渡辺　寿雄

【アクセス】

鴨川市は、千葉県の南東部に位置し、海岸部には鴨川シーワールドや太海フラワーセンターなどの観光施設や旅館・ホテルが立ち並ぶ房総観光の中核都市です。

東京駅からJRで2時間、その他に東京湾アクアラインを通る定期バス（2時間）があります。加えサミット開催時には羽田空港までの直通バス（所要時間1時間30分）を運行する計画です。

【都市農村交流の現状】

鴨川市大山千枚田での棚田オーナー制度は、12年度39名でスタートしましたが、田植えや稲刈り時には家族・親戚縁者又は会社同僚といった具合に200名を超える人たちが作業をします。それ以外にも6月の畦の草刈り、雑草は伸びるのが早く7月・8月にも草刈り作業があります。年6～7回は農作業に来なくてはなりません。

13年度は、12年度からの継続オーナー32名を含む112名となりましたが、受け入れ施設として13年4月に研修室、談話室、トイレ、シャワー室などを備えた棚田倶楽部がオープンし、オーナーのみならず、一般の人たちの田植え体験、稲刈り体験も受け入れるなど、これまで以上に交流が図られています。

【サミットテーマ】

鴨川市の大山千枚田は、「東京から一番近い棚田の里」として幅広い支持を集めていることから、仮称ではありますが「棚田と都市・保全と共生」として進めます。

【サミット内容】

従来型のサミットを継承しつつ、「みんなのサミット」をめざし棚田に関して誰でも意見がいえる環境づくりとして分科会形式の採用、及び誰もが参加でき棚田を知り、体験できるイベントを実施するため、現在、千枚田保存会や棚田オーナーをはじめとする都市側の支援者にも加わっていただいての専門部会を設置して準備を進めています。

【サミット期日及び期間】

従来型のサミット（1部）に加え、イベント（2部）を実施したいことから、14年8月30日（金）から9月1日（日）の3日間を考えています。

【情報の発信】

13年10月に、鴨川市ホームページと大山千枚田保存会のホームページでお知らせすると共に、市広報や地元紙にも掲載しています。

14年1月には、全国棚田（千枚田）連絡協議会の会員以外をも含む、全国の自治体に対し、事前の参加呼びかけをしていきたいと考えています。

楽しいサミットにします。皆さん是非参加して下さい。

Topics

西有田町「棚田みちくさウォーキング」開催

10月28日(日)西有田町の秋の収穫感謝である「棚田とっこ積みフェスティバルin 西有田」のイベントの一部として棚田みちくさウォーキングが開催されました。このウォーキングは西有田町の国見山系に段々と石垣をのぞかせる棚田群の中を歩いてもらい、その素晴らしさに直接触れてもらおうと今年から企画したものです。

当日は朝から雨がちらつくあいにくの天気だったにも関わらず、県内外から106人が参加。雨のため予定のコースを短縮して、本来なら、折り返し地点で昼食会場であった、国見棚田公園「棚田館」からのスタートとなりました。雨合羽スタイルでのウォーキングで、参加者もとまどい気味でしたが、途中の「みかんちぎり」の体験コーナーでは色づいたみかんを手にいっぱいちぎったりしてゴールの棚田とっこ積みフェスティバル会場まで、棚田を眺めながら、思い思いのスタイルでウォーキングを楽しみました。

また、ゴール地点に設けた、西有田町の特産品である「葉隠牛」の試食コーナーでは、その美味しさに、思わず笑顔がこぼれる光景も見られました。

参加者のみなさんから頂いたアンケートでは、「棚田やあぜがきちんと整備されて素晴らしい」「急な坂道にびっくりしました」などの感想の他「雨でせっかくの景色が楽しめなかった」などの意見もあり、天候の悪さが少し悔やまれる結果となったようです。ただ、どのアンケートにも「来年も参加します。」の嬉しい文字が書かれており、このウォーキングへの期待の大きさに、驚かされました。この棚田みちくさウォーキングは来年も開催予定ですが詳細については企画中です。皆さん楽しみお待ちください。(佐賀県西有田町役場　企画政策課 吉永繁史)

みちくさウォーキングのゴール地点の棚田とっこ積みフェスティバルで、わら細工の体験をする参加者。

Topics

岐阜県恵那市「棚田稲刈り体験ツアー」の残したもの

9月30日(日)、岐阜県恵那市中野方町坂折で「第2回棚田稲刈り体験ツアー」が恵那市農業振興協議会主催で実施された。

2年目を迎えた今回の「棚田稲刈り体験ツアー」は開催地、坂折地区の活性化を促す一因となったのではないだろうか。その大きな要因は、地元自治会が作業指導員の他に、女性を必要とする昼食のまかない方などを担当したことで、多くの住民が参加できる状況を作った。特に女性の出番ができたことがとても大きかった。(地元参加者　男性15名、女性24名)

棚田の保全、活用がいわれている中、地元住民の大方はどちらかといえば無関心に近い。しかし、このイベントに参加したことで、棚田のもつ多様性に気づかれたのではないだろうか。特に中高年の婦人層に活気が出始めた。

ようやくスタートラインに着いた棚田の保全と活用、私たちはその可能性を探りながら、多くの棚田地域で展開されているオーナー制度、米の産直等参考にしながら地域の活性化を図っていきたい。

12年度に始まった「中山間地域等直接支払い制度」そして、今夏発足した「坂折棚田保存会」も大きな役割を担い始めている。

「基盤整備をしなければ、取り残されてしまうのではないか」と思われた棚田は、今まさにその多様性の中で変貌しようとしている。(岐阜県恵那市中野方町坂折　飯田和昭)

事務局ニュース

事務局、福岡県浮羽町からのお知らせコーナーです。

棚田サミットを終えて

8月31日～9月1日に石川県輪島市で開催された第7回全国棚田(千枚田)サミットでは、地元をはじめ、全国の会員皆様、来賓、一般参加者、行政関係者のご支援をいただき、盛会に終わることができ、誠に感謝申し上げます。棚田と森林の関わり合い(共存共栄の連動)や棚田保全への細かな取り組みの様子、棚田保全気運を盛り上げるための結婚式など、心に残るサミットになったと感じています。

棚田は今、おいしいお米の生産地として、日本の原風景の景観・観光地として知られるようになったもう一方で、たいへんな苦労でその棚田が守られ受け継がれていることや後継者確保の難しさ等が注目されてきたようです。これは農政の棚田保全施策の推進とともに、全国会員皆様のいろいろな棚田保全活動(棚田オーナー制度、棚田を舞台としたイベント、棚田に関する商品販売の展開、棚田での教育活動の展開等々)が活発になり、輸入農産物や食糧自給率、消費者の安全志向・健康志向への関心の高さ等の影響を受けながら広く報じられるようになったことが一因だと考えます。さらに棚田の公益的機能への理解を深める努力が必要だと思っています。

棚田サミット会場からは、全国各地域の棚田保全活動の発表の場を作ろうというご意見もいただきました。自分たちの地域の活動は容易に知ることはできますが、全国的な動きになると、この会の情報交換機能でないと把握できないと考えます。そこで、あなたの地域で行っている棚田保全活動の事例(様式自由、パンフレット等を添付、子ども向け教育資料等。お問い合わせ先として、団体名、担当者、電話番号、ファクス番号等をお書き添えください。)を事務局までお送りくださいますようお願いいたします。

棚田活動事例送付先
〒839-1497　福岡県浮羽町役場内　全国棚田(千枚田)連絡協議会事務局(TEL：0943-7-2111　FAX：0943-7-7820)

事務局からのお願い

会員が異動され、連絡がとれなくなるケースも見られます。異動の際は、事務局へも住所変更等のご連絡をよろしくお願い致します。

お便りテラス

8／31～9／1の2日間、棚田サミットに参加させて戴き有り難うございました。私は、昨年の浮羽町、星野村に続きまして2回目の参加でしたが、今回も沢山のことを学び、感動も戴きました。

基調講演、富山和子教授からは「日本人は、土を養って来た民族である。田圃が林を、森を育て森は、川を育て、海を養って来た。おいしい魚も食べられる。農山村がこけたら都会がこける。」正に、21世紀の日本の進路への重要な提言を戴きました。

翌日の千枚田の結婚式は、日本海の青さと共に、感動的なフィナーレでした。こころに強く焼き付きました。棚田の価値をしっかりと受け止めさせて戴きました。

この棚田は、先達の田園文化の継承と治水と景観と美味い米の生産です。高齢化が進み、維持が難しくなってきている中で、都会では、失業率が上昇しています。もっと都会の人達に棚田の価値、農山村の魅力を知って貰う必要性を感じました。隅田川の堰堤や上野公園に、青いテントのホームレスの人達を見ます。都市の自治体の人達と協力して、働きかければ、働き手も何人かいると思えます。

今年は、豊作だとか。嬉しい筈のニュースのかたわらで、青田刈りの話を耳にします。もったいないことです。もっと、もっと日本人に米を食べてもらう様に働きかけましょう！　もっと、もっと、米を活かすことに取り組みましょう！　米からパンを作る。美味いですよ！　米は日本人の動物的適合植物です。健康に良くて、長生き出来ることをもっと知らせましょう。

工業中心の20世紀から、工業と農林水産業のバランスの取れた社会への回帰が、21世紀の日本に必要なのです。自然が、豊かになり、東洋のパラダイス、日本になれるのです。アスファルトとコンクリートの中での生活は、おかしな日本人を作ります。木や林や森の中で暮らすところに豊かな心の日本人が生まれます。

9月11日、アメリカで、悲しい同時テロ事件が発生しました。ブッシュ大統領は、武力での報復をするでしょう。世界の人々は、皆賛同するでしょう。私も仕方ないことだと思います。しかしながら、21世紀も戦争で始まる世界は、惨く、切ないものに思えます。なぜ、人々はそんなにまで憎しみ合わなくてはいけないのでしょうか。お互いにもっと相手を理解する道はないのでしょうか。お金とか、経済とか、武力とか、そんなものでしか解決出来ないのでしょうか。私はもっと道はあると思います。21世紀の日本は、そんな役割を果たす国にならなければ、いけないと思います。

2000年の日本の歴史をしっかりと見据えて見たいと思います。狩猟文化と農耕文化、東洋人と西洋人、戦後50年、アメリカには、大変にお世話になりました。しかしながら、アジア人である日本は、隣人のアジア人と仲良くして、農耕文明と工業文明のバランスの取れたリーダー国家が、世界から期待されている日本の21世紀像だと思えます。

今回、影響は少ないようですが、多くの食料を輸入に頼っている日本は、先進国の中でも極端に低い穀物自給率の国です。有事というけれど、本当に安心できるのでしょうか。棚田を見て、アメリカのテロ事件を見て、今こそ、冷静に日本の進路を変換すべき時だと痛感する次第です。皆様のご検証をお願い致します。

2001・9・14

（サムエル敷島　角田　実　神奈川県・個人賛助会員）

敬具

情報・BOOKSなど

●ひろしまの棚田写真コンテスト作品募集中！

ひろしまの棚田写真コンテスト実行委員会（広島県・広島県土地改良事業団体連合会）主催、棚田のフォトコンテストが作品を募集中だ。応募資格は、広島県に在住の方（プロ・アマ問わず）。募集作品は、広島県内の棚田を撮影した未発表作品。作品規格は、四つ切り以上のフリーサイズ。応募締め切りは、2002年1月11日（当日消印有効）。最優秀賞は、賞状・賞金5万円。問い合わせ・応募先は、広島県土地改良事業団体連合会企画情報課
TEL：082・502・7476

●新潟県松之山町フォトコンテスト作品募集中！

日本の原風景「新潟県松之山町の自然景観」をテーマに、松之山観光協会が主催で、松之山町のフォトコンテストを実施中。応募資格は、応募期間2001年3月1日～2002年2月末日までのあいだに、同町の宿泊施設に宿泊の上、撮影された方。

応募作品は、同期間中に撮影されたもので、六切または四切プリントのもの。単写真に限る。応募料一人2000円、一人5点まで。応募締め切りは、2002年3月末日まで（当日消印有効）。最優秀賞1名には、賞金50万円と富士フィルム特製カメラ、棚田米コシヒカリ。問い合わせ・応募先：松之山町観光協会「写真コンテスト」係
TEL：02559・6・3011

●新潟県安塚町　田舎雪国写真コンテスト作品募集中！

新潟県安塚町の四季の写真を募集中。田舎、雪国らしい四季折々の風景、祭事やイメージ的な作品もOK。応募規定は、キャビネ判から四つ切サイズで、2001年1月1日以降に安塚町及び東頸城郡で撮影された未発表自作の作品。作品は一人3点まで。応募締め切りは、2002年2月28日（当日消印有効）。最優秀賞1点には、賞金15万円。問い合わせ・応募先：（財）雪だるま財団
TEL：02559・2・3988

■写真集『棚田百選』

発行：講談社　定価2800円（税別）撮影：森田敏隆

棚田百選134カ所を完全収録の写真集。撮影行9万5000キロ、「棚田百選」に選ばれた棚田の四季が、沿革・交通情報・撮影ガイド付きで紹介されている。

情報・BOOKS、お便りテラスコーナーへお便り、ご意見、ご感想、情報をお待ちしています。ライステラス編集部FAX：03・5389・0078

新しく会員になったみなさま

個人正会員　鈴村　直（岐阜県恵那市）
個人賛助会員　河合哲玄（岐阜県恵那市）

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織
全国棚田（千枚田）連絡協議会
お申し込み・お問い合わせは協議会事務局
福岡県浮羽町　情報振興課
〒839－1497　福岡県浮羽郡浮羽町朝田582－1
TEL:09437・7・2111　FAX:09437・7・7820

会員募集中

編集後記

第7回全国棚田サミットに参加することができました。回を重ねていくと、顔見知りがどんどん増え、再会して近況報告をし合うということも喜びの一つとなってきました。それが良い刺激となり、またネットワークが広がっていくさまを見るのは、「ライステラス」をつくることで連絡協議会の変化を見続けている者にとって、うれしいことです。今回、ありがたいことに千枚田結婚式を、地元白米でもっとも高齢という美人おばあちゃまといっしょに畦に腰掛けて見ることができました。かつて田んぼ作業の帰りに、海に下りて海産物を採って夕食にした話やそれぞれの田んぼについている名前などを教えてもらったりしました。どこか遠い目で結婚式を見ているおばあちゃんの胸のうちを少しだけ察しながら、千枚田がつないだわたしとおばあちゃんのこころを大切にできないものか、と考えさせられたサミットでもありました。千枚田結婚式のおかげで、おばあちゃんも会場に足を運び、わたしはステキな女性と出会えました。　石井里津子